

徐文明氏のコメントに対する回答

菅野 博史

(日本創価大学)

徐文明教授、コメントありがとうございます。

法雲が『法華義記』のなかで、『華嚴經』に言及しないことは、法雲が『華嚴經』を自分の教判思想の中に組み込んでいないことを意味すると私が指摘したことについて、回答したいと思います。徐文明先生は、「漸教の五時について討論するときには、頓教の經典としての『華嚴經』に言及する必要はない」と指摘されました。徐先生のご指摘はたいへん道理のあることだと思います。私の文章に表現不足の点があったと思います。

私の主張したかったことは次の点です。

論文の注②3で引用しましたが、敦煌写本『法華義記』(S2733+S4102)は、「華嚴会上、始見我身、聞我所説、即便信受。」(T85. 179a6-7)と述べるように、『法華經』涌出品の「此諸衆生始見我身、聞我所説、即皆信受入如來慧。」(T9. 40b8-9)の文に『華嚴經』の説法を読み取っています。

実は、後代の吉蔵、智顛の注釈書もまったくこの敦煌写本と同じように、涌出品の經文に『華嚴經』の説法を見いだしています。具体的には、吉蔵『法華義疏』卷第十、「始見我身聞我所説者、即華嚴之會諸菩薩等聞説華嚴、即入佛慧。」(T34. 600c27-28)、智顛・灌頂『法華文句』卷第五、「例如今佛先説華嚴、後説法華。故文云始見我身聞我所説、入如來慧。除先修習學小乘者、而今亦令入如來慧。與此義同也。」(T34. 61a18-21)などを参照されたい。

法雲は、当該の涌出品の文に注意していません。私はこの点を指摘したかったのです。

徐教授は、法雲の『法華經』に対する分析が比較的客観的であったと指摘されています。私もこの点について基本的に賛成しますが、次のような問題点もあると思います。經典の成立史から見れば、『法華經』を『涅槃經』や『華嚴經』と同一の土俵で論ずることはできないことはいうまでもありません。しかし、六世紀の中国で、教判思想を議論する場合に、『法

華経』と『涅槃経』、『華嚴経』とをそれぞれ比較することは避けて通れない問題でした。現実には、法雲は『法華経』と『涅槃経』については比較しています。したがって、智顛、吉蔵が『法華経』の中に、『華嚴経』の説法を見出し、教判思想を形成するために、『法華経』と『華嚴経』とを思想的に比較することは重要な努力であったと思います。